

じゆく  
ひなみ 塾「こくごとさんすう」  
こくご なに ほぞんぼん  
国語とは何か(保存版)

さくせい じゆくじゆくちよう くらかわゆういち  
作成： ひなみ 塾 塾 長 黒川 裕 一

こくご いちばんだいじ かもく  
国語はなぜ一番大事な科目なのか？

- 科目についていうとき、必ず「国語・算数・理科・社会」といいます。国語は、いつも一番です。これはなぜでしょうか？
  - 国語が私たちの暮らす日本という国の言葉だからではありません。国語(言葉)こそが、人が人として生きる力の根本だからです。
- 生きるとは何でしょうか。
  - これには、二つの面があります。ひとつは、欲しいものを手にに入れること、すなわち「プラスの達成」です。もうひとつは、問題を解決し、自分やまわりの人たちにとってよりよい状況を生み出すという、「マイナスの改善」です。
  - 国語(言葉)は、自分自身や相手と話すことを通して、「プラスの達成」や「マイナスの改善」を実現するのに、最も役に立つ道具であり、だからこそ生きる力の根本なのです。
  - 国語(言葉)を使って行うやりとりを、コミュニケーションといいます。つまり、国語(言葉)はコミュニケーションの道具なのです。

れいだい  
例題1:

- (1) 「プラスの達成」の例を、1分間で、できるだけたくさん挙げましょう。
- (2) 「マイナスの改善」の例を、1分間で、できるだけたくさん挙げましょう。
- (3) (1)や(2)で挙げた例からひとつ選び、それを達成するためのアイデアについて5分間だけ話し合ってみましょう。

- 話し合い(コミュニケーション)は、うまく行きましたか？そもそも、話し合いがうまく行くととは、どういうことでしょうか？

こくご なに まな きょうか  
国語とは何を学ぶ教科なのか

- 話し合いがうまく行くととは、ちょっと難しい言葉を使うと、「生産性が高い」ということです。
  - 生産性とは、「生み出されたもの÷使ったもの(時間、エネルギーなど)」のことです。より少ないもので、より大きなものを生み出せば、生産性が高いということになります。例えば、話し合いであれば、より短い時間で、話し合っている人たちの多くが賛成できるようないアイデアが出れば、生産性が高いといえます。
  - 勉強や仕事も同じです。短い時間で成果が出れば、それだけ生産性が高いのです。
- 生産性が高いと、いいことがたくさんあります。

れいだい  
例題2:

- (1) (話し合いに限らず)生産性が高いと、どんないいことがありますか？1分間で、できるだけたくさん挙げましょう。

- いろいろ挙げてみると明らかになるように、話し合いに限らず、生産性が高いと、いいことがたくさんあります。大事なものは、その「いいこと」は、自分自身にとってだけでなく、他の人たちにとってもいい場合が多いということです。つまり、生産性の高さは、自分、そしてまわりの人たちに幸せをもたらすということです。
- 人間は、地球上で一番幸せになる可能性を持った生き物です。なぜなら、自分一人で考えるだけでなく、他の人たちと話し合って、みんなで生産性を上げることができるからです。そして、そのための道具が国語(言葉)です。だから、国語は、学校で学ぶ科目の中で一番大事なのです。
- 従って、国語で学ぶ、一番大切なことは、話し合い(コミュニケーション)の生産性の上げ方です。

れいだい

例題 3:

- (1) みんなでしりとりをします。ゴールは、1分間のうちにできるだけ多くの言葉をしりとりでつなぐことです。話し合いながら  
 なんと おこな じっさい せいさんせい あ  
 何度か行い、実際に生産性を上げてみましょう。

- 生産性を上げるために、皆さんは何をしましたか？ルールを決めたはずです。しりとりを使う言葉は、ひとりひとりが自由に選べます。しかし、生産性を上げるには、そのためのルールをみんなで決めて、守る必要があります。よりよいルールを決め、それをきちんと守ると、生産性は必ず上がるのです。
- 国語(言葉)も同じです。話し合い(コミュニケーション)の生産性を上げるには、ルールをみんなできちんと守る必要があります。その上で、ひとりひとりが自分の感じたことや考えたことを言えばよいのです。
- 国語(言葉)のルールは、実はそれほど多くはありません。小学生のうちには、一番大切なポイントである以下の4つを押さえておけば十分です。

しょうがくせい まな ほんたいせつ こくご ことば  
 小学生のうちに学ぶ1番大切な国語(言葉)のルールは？

- (1) 主語と述語
- (2) 指示語(特に「これ」「それ」「あれ」)
- (3) 助詞(特に「は」「も」「が」)
- (4) 接続語(特に、「ゆえに」「しかし」)

しゅご じゅつご  
 I 主語と述語

- ほとんどの文は、「私が行く」「あなたが手伝う」「彼が食べる」のように、「○が□する」という形を取ります。○にあたるものを主語、□にあたるものを述語といいます。
- 「彼は小さい」「その花はきれいだ」などの文は、「小さい」「きれいだ」が「行く」「手伝う」のような動作ではありませんが、日本語ではこれらも述語としてひとくりにします。(英語などはそうではありません)
- 「○が□する」という文は、「○が□しない」とすることによって、意味を反対にすることができます。これを「否定文」といいます。例)「私が行く」→「私には行かない」
- 「○が□する」という文は、「○が□しますか?」とすることによって、相手に尋ねる文にすることができます。これを「疑問文」といいます。例)「あなたが行く」→「あなたがいきますか?」
- 「○が□する」という文は、「○は□しました」「○は□しています」などとすることによって、述語が表す時間を「現在」「過去」「未来」などいろいろにすることができます。これを「時制」といいます。例)「私が行く」→「私が行った」

れいだい

例題 1: 以下の例文を読んで、問いに答えましょう。

- (1) タロウ君は水を飲む。
  - (2) ジロウ君は魚を食べる。
- (ア) 主語に○、述語に□をつけましょう。
- (イ) 例文を否定文にして、述語を否定する言葉に波線をつけましょう。
- (ウ) 例文を疑問文にしましょう。
- (エ) 例文の時制を過去形(～した)にしましょう。

II 指示語～「何かを指し示す言葉」で、前後の文や段落をつなぎます。

(ア) 指示語の種類

	じぶつ 事物	ばしょ 場所	ほうこう 方向	にんしやう 人称	れんたいし 連体詞	ふくし 副詞	けいようどうし 形容動詞
コのグループ	これ(これら)	ここ	こっち(こちら)	こいつ(こなた)	この	こう	こんな
ソのグループ	それ(それら)	そこ	そっち(そちら)	そいつ(そなた)	その	そう	そんな
アのグループ	あれ(あれら)	あそこ	あっち(あちら)	あいつ(あなた)	あの	ああ	あんな
ドのグループ	どれ	どこ	どっち(どちら)	どいつ(どなた)	どの	どう	どんな

(イ) 指示語の用法

- 指示語の用法には、大きく分けて以下の二種類があります。
  - 実際に人や物を指す：話す際に、比較的近くにある何かを具体的に指す用法です。
    - ◇ コのグループは、話し手の近くにあるものを指します。
    - ◇ ソのグループは、聞き手の近くにあるものを指します。
    - ◇ アのグループは、どちらからも離れているものを指します。
  - 文脈を示す：話題になっているものや記憶の中にあるものを指す用法です。
    - ◇ コのグループは、話の中に実際に導入された要素や、直後に導入する要素を指します(「私の言いたいことは、こうです。つまり...」)。
    - ◇ ソのグループは、仮定した要素や不特定の要素を指すことができるのが特徴です(「もし賛成してくれる人がいたら、その人に...」)。
    - ◇ アのグループは、記憶の中にあるものを引き出すときに用います。(「あの頃、ボクたちは毎日サッカーをしていました」)。

(ウ) なぜ指示語が重要なのか

- それは、指示語が文と文をつなぐからです。
  - (例) 山田さんが釣ったばかりの魚を送ってくれた。私たちはその魚をその日のうちに食べた。

(エ) 指示語の注意点

- 指示語の注意点は、「それが何を指し示しているのか」を正確にとらえることに尽きます。基本的には、以下の2つのことに注意すれば大丈夫です。
  - 指示語の指すものは、原則としてそれより前にある。(上で紹介した、「直後に導入する要素を指すコ系列の指示語」(「私の言いたいことは、こうです。つまり...」)のように、後ろにあるものを指すのは例外的です)
  - 単数か複数かに注意する。(例えば、「三人の子供が、一人のおばあさんを慰めていた。彼女は彼らに何度もお礼を言った」の「彼女」と「彼ら」が何を指すかは、単数と複数に注意すればすぐに分かります)
- 「指示語の指す内容を示しなさい」という問題に答える場合は、あと3つのことに注意します。
  - 文中の言葉を使って答える。(指示語は文中の何かを指しているのですから、答えは必ず文中にあります。自分で勝手にひねり出してはいけません)
  - 文の終わりを体言化する。(「体言化」とは、名詞にすることです。なぜならば、指示語の指す内容は、例えば「これ」「この本」などの違いはあっても、結局は例えば「昨日買った本」のように名詞に落ち着くからです)
    - ◇ なお、指示語が具体的な「物」を指すわけではないこともよくあります。その場合は、「山に登り続けるということ」「きれいな空気はみんなの財産であるということ」などのように、「～こと」とまとめるのが一般的です。

- さいご あ かくにん しじご き ないよう おも しじご か あ ただ  
 ▶ 最後さいごに当あてはめて確かくにん認しじごする。(指示語きの指ないようす内おも容しじごと思かわれるものあを指示語ただの代さいごわりに当あてはめてみれば、正ただしい  
 かなら わ いみ とお いちどけんとう なお  
 かどうか 必かならず分わかります。すんなりと意いみ味とおが通いみれば OK。そうでなければ、もう一いみ度とお検いちどけんとう討なおし直いみしましょう)

れいだい いか れいぶん なか しじご すべ なに さ あき  
 例題1: 以下の例文れいだいの中いかにある指示語れいぶんを全なかてかっしじごこでくすべり、それが何なにを指さすかあきを明れいだいらかにしあきましょう。  
 わたし さい ちち いろえんぴつ か いろえんぴつ いま いま わたし  
 ① 私わたしが5歳さいのとき、父ちちが色鉛筆いろえんぴつを買かってくれた。②その色鉛筆いろえんぴつは、今いまはもうない。③でも、ケースいは今いまでも私わたしの  
 つくえ ひだ なか み ちち いま おも だ  
 机つくえの引ひだき出しの中なかにある。④それを見みると、あちちのときいまの父おものこだを今いまでも思おもい出だす。

こた  
 答え:

れいだい いか れいぶん なか しじご すべ なに さ あき  
 例題2: 以下の例文れいだいの中いかにある指示語れいぶんを全なかてかっしじごこでくすべり、それが何なにを指さすかあきを明れいだいらかにしあきましょう。  
 べんきょう くる たの べんきょう えがお  
 ① 勉強べんきょうは、苦くるしいものではない。②それどころか、楽たのしいものである。③だから、勉強べんきょうするときは、いえつも笑え顔がおですること。  
 ぜったい い まも だれ かなら べんきょう  
 ④そして、「できない」と絶ぜ対ったいに言いわないこと。⑤これらを守まもれば、誰だれでも必かならず勉強べんきょうはできるよべんきょううになる。

こた  
 答え:

III 助詞～単語(自立語)の後について、意味を添えたり、単語どうしの関係を表したりします。

(ア) 助詞とは？

i. 文節： 文の構成要素で、文を実際の言葉として不自然にならない程度に区切ったとき得られる最小のひとつのまりのものを「文節」といいます。

① 例えば、「私 は/カレーが/好きです」は、「私」「カレー」「好きです」の3つの文節に分けられます。

② 文節は、自立語と付属語からなります。

ii. 自立語： 単独でも文節を構成することのできる単語を「自立語」といいます。

① 「私 は/カレーが/好きです」の場合は、「私」「カレー」「好き」がこれにあたります。

iii. 付属語： 自立語のあとに付いて、意味を添えたり、単語どうしの関係を表したりする働きをする語を「付属語」といいます。

① 助動詞・助詞がこれに属します。

② 付属語のうち、活用のないものを「助詞」といいます。「活用がない」とは、「形が変わらない」という意味です。

③ 「私 は/カレーが/好きです」の場合は、「は」「が」がこれにあたります。

(イ) ポイントとなる助詞～これらの助詞に出くわしたら線を引く習慣をつけましょう。

i. 逆接の助詞(も、けれど、が...など)： 逆接の接続語と同様、これらの助詞の前後で流れが逆転します。

① がんばっても、結果が出ない。

② がんばったけれど(がんばったが)、結果が出なかった。

例題1: 以下の例文の中にある、逆接の助詞に二重線を引き、より大切な情報に線を引きましょう。

(1) 私 は昨日ご飯を食べなかつたが、今もお腹が空いていない。

(2) 「やっても、無理だよ」と、彼女はやる前からあきらめていた。

ii. 区別の助詞(は)： 「それと区別される『他の何か』は何だろう？」と考える必要があります。

③ 彼は行かなかった。(例えば、「彼女は行ったけれど」という状況があるわけです)

例題2: 以下の例文の中にある、区別の助詞に二重線を引きましょう。

(1) とにかく、ボクは帰ります。

(2) 国語は好きですけどね。

iii. 添加・類推の助詞(も、でも、さえ、すら、まで)： 「これも『他の何か』は何だろう？」と考える必要があります。

④ 彼も行った。(例えば、「彼女も行ったし」ということを推し量れます)

⑤ ボクでも解ける問題だ。(例えば、「まして君のような天才ならばすぐに解ける問題だ」ということを推し量れます)

⑥ 彼は「バカ」とさえ(すら/まで)言った。(例えば、「彼は他にもいろいろと言った上で」ということを推し量れます)

例題3: 以下の例文の中にある、添加・類推の助詞に二重線を引きましょう。

(1) 学級委員の山本さんも宿題を忘れた。

(2) そんなの、赤ちゃんでもできるよ。

(3) そのおじさんは、私にまでお菓子を買ってくれた。

IV 接続語～文と文や段落と段落のつながり方を示します。

(ア) 文と段落

- i. ひとつの「。」から次の「。」までのかたまりを、「文」といいます。
- ii. いくつかの文が集まってより大きなかたまりとなったものを、「段落」といいます。
- iii. 文と文や段落と段落のつながり方を示すのが、接続語です。

(イ) 主な接続語～「ゆえに」と「しかし」のふたつを、まずは押さえましょう。

- i. ユエニの関係：①である。ユエニ、②である。
- A) 働き：「原因→結果」「根拠→主張」を表します。全ての主張の背骨であり、最も重要な接続です。なぜなら、話し合い(コミュニケーション)は、お互いの主張を伝え合うことが根本にあるからです。そして、主張には根拠が求められます。

例題1: 以下の4つのお医者さんの言葉のうち、どれが一番安心しますか？それはなぜですか？

(1) 風邪を引いたかもしれない？うへん、どうでしょうね。

(2) あなたは風邪をひいていませんよ。

(3) あなたは風邪をひいていませんよ。だって、今朝の雨がそう言っていたから。

(4) あなたは風邪をひいていませんよ。なぜなら、熱もないし、喉も赤くなっていませんから。

- B) 例：①彼は顔が青い。②ゆえに、彼は病気に違いない。
- C) 主な接続語： 1. (前→後)ゆえに、だから、それで、したがって、その結果、よって、そこで ...など
- 例：①彼は賢い。②だから、無理はしなかった。(①→②)
- 2. (後→前)なぜなら、というのは、というのも、だって ...など
- 例：①彼は無理をしなかった。②なぜなら、彼は賢いからだ。(①←②)

例題2: 以下の文章の中にある「ユエニの接続語」を逆三角で囲み、「ユエニの関係」にある文の番号を、『①→②』(①である。ユエニ、②である)のように矢印で示しましょう。

(1) ①私の家は熊本市にある。したがって、②私は熊本市の住民である。

(2) ①私はテストで0点だった。なぜなら、②全く勉強しなかったからだ。

(3) ①太り過ぎの人は病気になりやすい。だから、②彼はやせた方がいい。

- ii. シカシの関係：①である。シカシ、②である。
- A) 働き：それまでの話の流れを逆転させます(「逆接」といいます)。逆接の後に重要なポイントが来ることが多いので、要注意。「ユエニ」の次に重要な接続です。
- B) 例：①彼は顔が青い。②しかし、彼は病気ではない。
- C) 主な接続語：しかし、けれども、だが、でも、だけど、ところが、それなのに、にもかかわらず ...など

例題3: 以下の文章の中にある「シカシの接続語」を三角で囲み、より大切な情報の方に線を引きましょう。

(1) ①彼と一緒にいると楽しい。でも、②私は彼が好きではない。

(2) ①私は彼が好きではない。けれども、②彼と一緒にいると楽しい。

例題4: 以下の文章の中にある「ユエニの接続後」を逆三角で囲み、「シカシの接続語」を三角で囲みましょう。(ユエニの関係は矢印で表し、シカシの関係は、より大切な情報の方に線を引きましょう)

(1) ①彼と一緒にいると楽しい。でも、②私は彼が好きではない。だから、③私は彼とはあまり遊ばない。

(2) ①私の家族はみんな早起きだ。だから、②私も早起きする。けれども、③本当は、朝眠くてたまらない。

そうごうもんだい  
総合問題

例題1: 以下の文章を読んで、問いに答えましょう。

わたし いっ げつかんまった べんきょう  
① 私は一か月間 全く勉強しなかった。②そんなことではいけないことくらい、私 でも分かっていた。しかし、③勉強する気になれなかった。なぜなら、④友達に「バカ」と言われたからだ。⑤その場で、「私はバカじゃない！」と言い返せばよかったが、できなかった。⑥そうすることさえできず、私は泣きながら家に帰った。⑦悔しくて、苦しくて、ご飯も食べられなくなった。だから、⑧この一か月で私は5キロもやせた。でも、⑨それも終わりにする。⑩今日からは、ちゃんと勉強するんだ。

と  
問い

- (1) 「ユエニ」の接続語を逆三角で囲み、「シカシ」の接続語を三角で囲みましょう。そして、ユエニの関係は矢印でしめし、シカシの関係はより大切な情報の方に線を引きましょう
- (2) 指示語を全てかっこでくりましょう。
- (3) 「逆接」「区別」「添加・類推」の助詞に全て二重線を引きましょう。
- (4) ②「私でも分かっていた」の後に、「まして〇〇は分かっていた」と付け加えるならば、〇〇には例えば何が入りますか？
- (5) ⑤「その場」とは、どの場ですか？
- (6) ⑥「そうすること」とは、どうすることですか？
- (7) ⑥「そうすることさえできず」の後に、「まして〇〇することはできず」と付け加えるならば、〇〇には例えば何が入りますか？
- (8) ⑦「ご飯も食べられなくなった」の後に、「まして、〇〇することもできなくなった」と付け加えるならば、〇〇には例えば何が入りますか？
- (9) ⑧「この一か月」とは、どの一か月ですか？
- (10) ⑩「今日からは、ちゃんと勉強するんだ」の前に、「〇〇だったけれども」と入れるならば、〇〇には例えば何が入りますか？
- (11) この人が一番言いたいのは、何番の文ですか？

例題2: 「今、この町では、ビー玉で遊んでいる子供が一人もいない」という文について、問いに答えましょう。

- (1) 「だから、この町でビー玉を売ろうとしても、全く売れない」という方向で、作文をしましょう。
- (2) 「だから、この町でビー玉を売ろうとすれば、必ず売れる」という方向で、作文をしましょう。

きょう ふくしゅう  
【今日のポイントの復習】

- (1) 国語はなぜ一番大切な科目なのでしょう？
- (2) 国語を学ぶ目的は何ですか？
- (3) 上の(2)を達成するためには、何をすればよいですか？
- (4) 上の(3)のうち、今日勉強した4つのポイントは何ですか？
- (5) 上の(4)で挙げた4つのポイントを更に具体的に振り返りましょう。

◇ここに書かれていることを完璧に身につければ、小学校卒業レベルとしては十分すぎるほどの国語の力が身につくようになります。何度でも復習し、ひとりですらすらと再現できるようになってください。